

壬申の乱の謎 と『筑紫都督府』と『大宰府』 永井正範

『古事記』・『日本書紀』は天神(あまつかみ)が日向に降臨し、その直系の神武天皇が奈良盆地に東征して本拠と定め、ここから全国を平定して、奈良朝廷になったと記す。古代史の研究者の間では、『記紀』の《天孫降臨》と《神武東征》は、《奈良盆地に生まれた勢力》の由来を《天上の神》に結び付ける神話に過ぎないが、日本列島では唯一この《奈良盆地に生まれた勢力》が王朝と呼べる国に育ち、奈良朝廷になったと見る史観が《定説》となっている。

だから『書紀』は、「九州は天神が降臨して以来、近畿王朝の支配下にあり、527年に磐井の反乱があったがこれも平定した」と記し、新しい処では、『筑紫大宰』の語を推古天皇17年の609年に載せ、664年・665年には『水城』・『大野城』・『基肄城』を造ったと記す。

《定説》に従う研究者はこうした『書紀』の記述をそのまま認め、「九州に近畿王朝とは異なる勢力が存在したかもしれない……」という疑問を持つことはないようである。そうして、「推古の時代以来、大宰府の地に、近畿王朝として守らねばならぬ都城があった」という**思い込み**があるようである。

しかし、唐は新羅と連合して663年に朝鮮半島の白村江で日本と百済の連合軍を破ると、

百済に、『熊津都督府』を、
筑紫に、『筑紫都督府』を、
新羅に、『鷄林大都督府』を、置いた。

さらに唐は、668年に高句麗を滅ぼし、20万人を捕虜として中国に連れ去って勢力を削いだ上、高句麗に、『安東都護府』を置く。

唐に連行された高句麗人20万人は奴隸として使役され、二度と郷里の土を踏むことは無かった。後に元(1271～1368年)は半島の高麗(936～1392年)を属国とし(1259年)、日本に遠征するときには属国の高麗を徹底利用した。1274、1281年の二度に亘って、高麗に軍船を千艘規模で建造させ、一万人規模で高麗人を日本遠征に動員した。このため高麗では、山から木がなくなり、船を造るために多くの国民が使役され、徴発された軍人は半数近くが帰還せず、食糧生産に携わる農民が不足して、攻められた日本以上の苦境に陥ったという。世界史上で、《他国の属国になる》とは、かかる扱いを受けることを意味する。このとき日本は、時の執権・北条時宗が、「降伏せよ」と恫喝する元の要求を退けて戦う道を選び、元の属国となることを免れた。これは武士が勇敢に戦ったためであり、「神風」の幸運に助けられたためであることも、良く知られている。

さて、《定説》の**近畿王朝一元史観**に立つ古代史学者は、「九州に**近畿王朝と異なる別の勢力の存在した**」ことを認めない。

だから、「唐と戦ったのは近畿王朝で、近畿王朝は確かに負けた」、

しかし、『書紀』を見ても、その後、唐とは友好関係を保っており、日本が唐に占領されたとは記していない。高句麗や、後の高麗のような扱いを受けたとも記していない、

「ここから見れば、『筑紫都督府』とは、近畿王朝の置いた『筑紫の大宰府』の唐風の呼称に過ぎず、『大宰府政庁』や『都府楼』の語も同義であろう、

と理解している。

しかし、事実はどうだったろうか？

「唐と戦って敗れ、唐に拠って『都督府』が置かれるという事態が如何なる事態を意味するか？」は、『書紀』の叙述に拠るのではなく、**中國史の視野**で見なければいけない。

そのとき、もし、「日本列島が近畿王朝によって統一されていて、近畿王朝が唐と戦って敗れた」のなら、唐は、唐と戦って破った百済と高句麗の本拠に『都督府』・『都護府』を置いて唐の属国としているのだから、同じ様に、近畿王朝の本拠の**奈良盆地**に『**日本都督府**』を置き、近畿王朝を属国としただろう。

「唐が筑紫に『**筑紫都督府**』を置き、近畿王朝の日本(やまと)が唐の占領を免れている」という事実は、『旧唐書』が記すように、600年代の日本列島には(**倭国**)と(**日本国**)の二つの主権国家があり、唐と戦って敗れたのは、九州にある王朝の(**倭国**)であって、**近畿王朝の(日本国)**は唐との戦いには加わらなかった」ことを示している。

私たちは『書紀』の脚色に騙されてはならない。

663年の白村江における敗戦の後、筑紫には唐の『**筑紫都督府**』が置かれ、唐の**占領軍**が滞在した。だから664、665年に、唐の**占領軍**の面前で、『書紀』の記すように、唐の侵略に備える軍事施設を造れる訳がない。『水城』・『大野城』・『基肄城』を造ったのは、唐の**占領軍**の撤退以後である。

さて半島の**新羅**は663年に唐と連合して戦い、勝利を収めたのに、敗戦国の百済・倭・高句麗と同じく、唐の属国とされたのだから面白くない。

ところが、670年、唐は西の吐蕃(チベット)に突如攻め込まれて大敗を喫する。吐蕃軍40万に対し、迎え撃つ唐軍は10万だから敵う訳がない。吐蕃は「唐が東の朝鮮半島に掛かり切っている」と見て攻め込み、念願の西域を手に入れようとしたのである。

世界情勢は油断ならない……、この西域での情報を得た新羅は、直ちに、朝鮮半島に駐留する唐の**占領軍**への攻撃を開始する。新羅にとって唐は宿敵の百済・高句麗を滅ぼし、うるさい倭を半島から駆逐してくれた恩人である。しかし、属国扱いは不本意であった。新羅は「これから唐は西の吐蕃で忙しくなる」と見て、唐からの**独立戦争**の拳に出たのである。

朝鮮半島が戦闘状態となれば、唐としては半島の先の海を越えた筑紫に、『**筑紫都督府**』を置いて占領軍を維持することは難しくなる。新羅との戦争が始まった2年後の672年、唐の筑紫占領軍総司令官・郭務棕は日本から帰国し、これ以後、『書紀』に『**筑紫都督府**』の記事も、唐の**占領軍**の記事も見えなくなる。すなわち、唐は日本列島を放棄して撤退したのである。

半島における**唐・新羅戦争**は670年から6年続く。新羅は着々と武力で旧百済領と旧高句麗領を支配下に収めていき、唐の占領軍は劣勢に立たされる。そして唐にしてみれば東の果ての朝鮮半島より、西域の方が重要だったようである。676年、唐は終に『**安東都護府**』を遼東に移し、これを東の最前線として、朝鮮半島から全面撤退する。これで新羅は念願の**半島統一**を果たしたのである。〔**統一新羅時代**、676～936年〕。

しかし、唐は吐蕃との戦争(670～704年)に集中するため、半島から手を抜いたに過ぎない、吐

蕃戦争が片付けば、いつ朝鮮半島に対し復讐に出てくるか分からない。新羅は唐が半島から撤退すると、直ぐ、唐に「謝罪使」を送って戦争行為に出たことを謝罪し、《唐の年号》を採用して《唐の冊封体制》に留まることを誓う。新羅は自身のメンツを捨てて唐のメンツを立て、唐の復讐を避けようと考えたのである。そして唐(618～907年)はその後、二度と朝鮮半島に軍隊を送ることはなかった。新羅は戦いだけでなく、外交でも勝利したのである。

百済と高句麗は唐に敗れて半島から消えた。筑紫、すなわち九州にあった王朝は唐に敗れて半島への足掛かりを失い、滅亡への道を歩む。唐は結局、半島から退き、《骨折り損のくたびれ儲け》に終わった。600年代後半の朝鮮半島の動乱は、唐を半島に引き入れてその力を借り、半島の統一を成し遂げた《新羅の一人勝ち》に終わったのである。

さて、『日本書紀』に拠れば、672年5月に郭務悰が帰国すると、6月に天武が《壬申の乱》を起こす。天武はこれに勝って、《日本列島の全権》を掌握する。乱の後、近畿王朝では褒賞が行われ、宴会に次ぐ宴会が催され、《大団円》となって、天武は終に《神》とまで呼ばれるまでになる。

しかし、《壬申の乱》は近畿王朝内部のクーデターに過ぎない。

天武はこれに勝って、何で、九州までの全権を掌握出来たのか？

《九州にあった王朝》、すなわち『旧唐書』に言う《(倭国)の王朝》は白村江で唐と新羅の連合軍と戦って負けた。

しかし、《九州にあった王朝》は近畿王朝と戦って負けた訳ではない。

唐が9年間の筑紫占領を切り上げて、672年に撤退したのであれば、《筑紫の支配権》は、当然には、現地のもとの支配者である《九州にあった王朝》、すなわち《(倭国)の王朝》の残存勢力の許に戻るだろう。

朝鮮半島の場合、新羅は6年にわたって唐の占領軍と百済と高句麗の残存勢力と戦い、武力で半島の統一を果している。しかし『書紀』に、近畿王朝と《九州にあった王朝(倭国)の残存勢力》との間の戦いは見られない。《筑紫の支配権》が、《九州にあった勢力》から、何もしていない近畿王朝に交代する理由は無い。

なのに何故、天武は《九州にあった(倭国)の残存勢力》の支配権まで手に出来たのか？

ここが、《壬申の乱の謎》である。

近畿王朝一元史観の学者から見れば、「九州に王朝など存在せず、日本は近畿王朝の基で統一されていた」のだから、「ここに何の《不思議》も有ろう筈がない」のは分かる。

しかし、九州王朝史観を採る研究者が、「九州に王朝があった」と主張するのであれば、この《壬申の乱》は《謎》であり、この《謎》を説明する必要がある。

「天武は近畿王朝内のクーデターに勝っただけで、何で、九州までの全権を掌握出来たのか？」

「九州王朝はどこに消えたのか？」

「やはり九州王朝など無かったのか？」

しかし、この《**壬申の乱の謎**》を説明し得た**九州王朝論者**を私は知らない。
と言う以前に、この《**壬申の乱**》を《**謎**》と捉えている**九州王朝史観**の論者を私は知らない。

2010年夏のことであったが、**古田武彦**氏系の古代史研究団体『古田史学の会』の有志が会の大御所・木村賢司さんの琵琶湖の別荘で合宿をした。私も会員であり、木村さんと親しかったから、前
の日から泊まり込んで会場の設営をし、当日の朝は全員の弁当と飲み物の購入に走った。

皆さんが集まり、**古田武彦**さんを囲んで昼食が済むと、木村さんが切り出した。

「**壬申の乱の後、近畿王朝は九州王朝を放伐したのか？九州王朝から禪譲を得たのか？**」

木村さんはこのように問題提起し、参加者全員に意見を表明するよう求められた。

つまり、木村賢治さんもやはり、《**壬申の乱**》を《**謎**》と意識されていたのである。

しかし適格な意見は聞かれなかった。古田さんからも決定的なお話はなかった。と言うより、古田
さんは、《**壬申の乱**》を《**謎**》と意識されているようには見えなかった。

私はと言えば、未だ五里霧中であった。

ではこの《**壬申の乱の謎**》を考えよう。

唐は、周辺国を戦争で負かして直轄領とし、これを統治するとき、その本拠に『**都督府**』を置いて
《**羈縻政策**》を採る(注2)。

《**羈縻(きび)政策**》とは、中国に友好的な現地人の有力者を中国の官吏である「**都督**」に任命し、
その「**都督**」を現地人に対しては「**王**」となし、唐の武力を背景に住民を統治させる方式を言う(注2)。
つまり、唐の傀儡政権を置くのである。

しかし私は日本の古代史の学者から《**羈縻政策**》の言葉を聞いたことがない。日本の古代史の
著作で《**羈縻政策**》の言葉にお目にかかったことはない。日本の古代史の研究界では《**羈縻政策**
》は想定外なのである。

しかし、唐は属国とした半島に『**都督府**』を置いて《**羈縻政策**》を採っている。筑紫にも半島と同じに『**筑紫都督府**』を置きおり、当然、《**羈縻政策**》を採ったのである。

「では、唐が『**筑紫の都督**』に任命した現地人は誰だったろうか？」

近畿王朝の歴史書『日本書紀』はこの辺の事情を一切語らない。「『**書紀**』は**近畿王朝以外**の王朝
の存在を認めない、日本全土は一貫して**近畿王朝の支配下**にあった、との建前を採る」。その近畿
王朝は唐とは戦っておらず、負けてもいない。「その**近畿王朝の支配下**にない王朝が九州に存在し、
その王朝が独自に唐と戦って敗れ、占領された」など、『書紀』に記す訳がない。記せば、「『**書紀**』の
近畿王朝一元史観は即、崩れる」からである。

だからこの処は『書紀』に頼らず、別個に考えるしかない。

《**九州にあった王朝**》は唐と敵対して戦った。しかし、同じ民族の近畿王朝は、遣唐使を派遣し

て唐と密接に接触した挙句に、唐との戦いを忌避した。であれば、唐は、友好的であった**近畿王朝**の「**王族**」の一人で、九州に縁故を持つ人物を、『**筑紫の都督**』に任命したのではないだろうか？

もし近畿王朝がこうして『**筑紫都督**』のポストを手にしたなら、近畿王朝は唐の占領軍を後ろ盾にし、労せずして《**九州の支配権**》を手に入れることになる……。

《**戦うことなく**》、《**禪讓を受けることもなく**》、**列島を統一出来たこと**になる……。

そこで唐が**筑紫から撤退すれば**、それこそ、《**大団円**》ではないか……。

このように突き詰めて行くと、

「**天武こそが、『唐の筑紫都督』であったのではないか……**」

という考えに辿り着く。

天武は九州の有力豪族・胸形氏の娘との間に長子・高市皇子を設け、壬申の乱で九州の豪族を味方に付けている。すなわち、**天武**は九州王朝の本拠の九州にいたことがあり、九州に強い**ゆかり**を持っている。

唐は、近畿王朝の王族の一人で、九州に**ゆかり**を持つ**天武**を『**筑紫都督**』に任じた。

中国側は**天武**を『**筑紫都督**』と呼んだ。しかし、近畿王朝は**天武**を『**筑紫大宰**』と呼んだのかもしれない。

『**大宰・総領**』の呼称は日本側の呼称であり、**九州王朝**が、**白村江前夜**まで、**筑紫**の長官と、**九州王朝**の配下にある**周防・伊予・吉備**の王に用いたものである。ここの処は私の認識であり、2014年の久留米大学『**公開講座**』で発表している。

そして唐が日本列島から去り、『**筑紫都督**』の**天武**が**近畿王朝**の**天皇位**に就くならば、**天武**は即、**九州**にある**王朝**と**近畿王朝**、双方の実権を併せ持つことになる……。

しかし**天武**は近畿王朝の皇位継承権は持たなかった……。

だから**天武**が**近畿王朝**の**天皇位**に就くには**クーデター**に拠るしかなかったのではないか……。

そしてまた天智天皇の娘を妃にせねばならなかったのではないか……。

それも四人とも全部を妃にし、競争手を排除する必要があったのではないか……。

皇位継承権を持たない近江出身の継体が天皇位に着くためには、前天皇・仁賢の娘、手白香皇女を娶って入り婿となって王朝内の合意を得る必要があったように、**天武**もまた前天皇・天智の娘を娶り、入り婿となる必要があったのではないか……。

その証拠に、間違いなく、天皇になるための正当な権限を有していたと見られる天智は、**天武**の娘を娶ったりしていない……。

『**書紀**』が「**天武**を天智天皇の弟で皇太子とした」のは、「**継体**を**応神五世**とした」のと同じで、『**書紀**』の脚色ではないか……。

『**書紀**』は「**天武**は天智の弟で、皇太子として次期天皇を約束されていたのに、天智が実子の**大友皇子**を後継にと考えるようになり、命まで狙われては蜂起せざるを得なかった」と言う。これも勝てば官軍の「**良く出来た大義名分**」と見るべきはないか……。

以上のように考えれば、《壬申の乱の謎》は全て説明が付く……。

天武は「天智天皇の弟」という隔絶した生まれにありながら、中央の近畿王朝政権では何の地位にも付いていない……。それに、天智の後継が問題となった時点で、突如として姿を現す……。

そもそも、天智には大友皇子他の実子があるのに、「弟の**天武**が天智の皇太子に定められていた」ということ自体、何の必然性も考えられない、不自然な話ではないか……。

つまり、「元々、**天武**は天智の皇太子であった」というのは、反乱を起こした、つまり秩序を乱した**天武**の側に、後付けで大義名分を付加しようとしたものではないか……、と考えられるのである。

もともと、近畿王朝の誰かが唐から『**筑紫都督**』のポストを得たのであれば、**天武**本人が『**筑紫都督**』でなくとも、近畿王朝が唐を後ろ盾として九州の支配権を手中にしたことに変わりはない。

しかし**天武**が天智の弟でなく、皇位継承権も無かったとすれば、『**筑紫都督**』でもない限り、「何で天智の実子と皇位を争うまでの力を蓄えることが出来たか？」の説明が付かない。

天武は九州王朝の王族の一人ではなかったか……、と考えることも出来なくはない。しかし、**天武**は近畿王朝側の王族でない限り、近畿王朝内のクーデターに顔を出せる筈もあるまいし、もし、**天武**が九州王朝側の王族ならば、ズバリ、九州王朝と近畿王朝の闘いとなって、九州王朝側に勝ち目があろうとは思えない。

だから……、やはり、「**天武**自身が『**筑紫都督**』であった」とする思い付きが捨て難いのである。

『書紀』に拠れば671年10月、天智の病が重くなり、**天武**は近畿王朝に召喚される。ここで**天武**は、天智と大友皇子に恭順を誓う。しかし、余りに大きな九州における実権を握ってしまった**天武**は、近畿王朝内で敬遠された。危険を察知した**天武**は髪を剃って、吉野に隠遁する。

そして、671年12月、天智は近江宮で崩御する。

翌672年5月、唐の占領軍総司令官・郭務悰が帰国する。この九州での変事を**天武**が伝え聞いていたかどうかは分からない。そこは分からないが、近畿にいる**天武**は筑紫の唐の占領軍には頼れない。

天武に残された道は、「座して死を待つか」、「大友皇子を切るか」、二つに一つ、ここは自ら道を切り開くしかない。

天武は東国へ逃げた……。

こうしてドラマは672年6月の《壬申の乱》へと繋って行く。

天武は東国に掛けた……、が、東国の豪族にしても**天武**に着くか、否か……、ここは掛けであった。しかし、大友皇子は若く、**天武**は既に大王としての智力と風格を供えていた。

そして、天は**天武**に微笑んだ……。

さて、唐が『**筑紫都督府**』をどこに置いたか？ は分かっていない。

先に述べたように、近畿王朝一元史観の学者は、『**筑紫都督府**』を近畿王朝が置いた『大宰府政庁』と同一視しているが、これは中国の歴史に無知なためで、論外と言うしかない。

唐は663年の白村江で筑紫と百済の連合軍を破り、筑紫を占領した。その唐が、占領軍総司令部として『筑紫都督府』を置くのに、博多湾からの大陸軍の襲来を恐れる必要は無い。だから、博多の背後の山の陰の窮屈な「大宰府」の地を選ぶ理由は無い。朝鮮半島を經由して大陸から武器等の物資の補給を受け、軍人が半島と往来するときの利便性を考え、いざというときには半島に素早く逃げ帰ることを考えるなら、当然に、博多湾岸に置くだろう。

672年その唐が筑紫から撤退し、天武が《壬申の乱》に勝って日本列島の全権を掌握する。これまで筑紫の防衛は《九州の王朝》自らが行ってきたが、近畿王朝政権は、ここで初めて筑紫防衛の当事者となる。唐は撤退した……、しかしいつ再来するか分からない。だからその再来に備え、博多湾岸ではなく、その背後に、『水城』や『大野城』の防衛施設を整備し、これに守られた山の陰の大宰府の地に、本土防衛と九州統治の本拠として『大宰府政庁』を置いた。

近畿王朝政権の『大宰府』の歴史は、672年以降に置いた『水城』や『大野城』とセットにして始まったのである。『書紀』・『続日本紀』に拠れば、このとき近畿王朝は、この2城を含め、対馬の『金城』から本拠の奈良の『高安城』まで計11基の山城を築いて防衛ラインを敷いている。

さて、九州王朝史観の古田武彦さんは、1979年に、『大宰府』の歴史を400年代の九州王朝の倭の五王以来のものとして、「九州王朝の本拠は大宰府である」と主張した(注3)。

古田さんは、「冒頭に挙げた『書紀』の推古の時代の『大宰府』の初出記事と、『水城』・『大野城』・『基肄城』設置の記事は九州王朝の事跡であり、『書紀』はこれを近畿王朝のものとして剽窃した」と考えたのである。

この「古田さんの仮説」をそのまま受け入れる九州王朝論者は多い。その一人、内倉武久氏は「大宰府は日本の首都だった」と言う。これは古田さんの「九州王朝の本拠は大宰府である」の主張を言い換えたに過ぎない(2000年、注4)。

近畿王朝一元史観の定説派は「大宰府」を〔近畿王朝の出先機関〕で、〔600年代初めの推古以来のもの〕と言い、九州王朝史観の古田さんは、その『書紀』の記述は九州王朝の歴史を剽窃したもので、「大宰府」を〔400年代の倭の五王以来の九州王朝の本拠〕だと言う。

両者で、「大宰府」を取り合う格好となったが、私の見る処、「大宰府」は672年の唐の撤退以後に設けられた近畿王朝の拠点であって、両者の言うほどに古くない。

「倭の五王」の時代、中国は南北で争っており、北朝には朝鮮半島の先の海を越え、日本列島までを侵略する余裕はない。また「倭の五王」は南朝の冊封体制に入っており、南朝の日本侵略など、もとより考えていない。中国の周辺国にとって400～500年代の中国の南北朝時代は、中国の侵略を恐れる必要のない安穏な時代だったのである。

そして九州にあった勢力は、300～500年代、朝鮮半島に渡り、伽耶を足場として、百済と新羅に肩入れし、半島に進出しようとする高句麗との間で戦いを繰り広げている。『書紀』はこの日本列島側の権力主体を近畿王朝であると剽窃しているが、その『書紀』を見ても、日本側に、半島の勢力が海を渡って筑紫を侵略することを警戒する節は見られない。

だから……、九州にあった王朝としては、博多の背後の大城山の陰の「大宰府」の地に防衛拠点を

置くなど考えもしなかったろうし、王朝の首都を置くのにわざわざこの狭い山陰を選ぶ必要などどこにも無かったのである。

さて九州には『神籠石』と呼ばれる 10 基の山城が残されている。この『神籠石』は、「筑紫平野を護る」形で配置されており、この筑紫平野に護られねばならない勢力の有ったことを示している。奈良盆地を本拠とする近畿王朝は、その奈良盆地を護るために、間違ってもこのような配置の山城は造らない。

そして、『書紀』・『統紀』はこの 10 基の『神籠石』を記さない。

さらに、『神籠石』山城は、『書紀』・『統紀』が載せる近畿王朝が造ったという 11 基の山城とは全く異なる特徴を備えている。すなわち、山城を囲む土塁の外側の根元に長径 70 cm ほどの 1 段の切石の列を延々数 km に渡って備えている。宮地岳だけは 3 段の切石列を備えているから、10 基の『神籠石』の中でも最も丁寧に造られている。一方、近畿王朝が造ったという『大野城』・『基肄城』・『水城』を含む山城はこの切石の列を持たない。

つまり、この『神籠石』を造ったのは、《近畿王朝とは異なる勢力》であり、これこそ《九州にあった勢力》であり、近畿にあった勢力を《近畿王朝》と呼ぶのであれば、《九州王朝》と呼んでも良いのではないかと考えられるのである。

では、九州にあった王朝がこの『神籠石』を造った時期はいつであったろうか？

中国は 100 年代の終わりに後漢が分裂して以来、四百年という長い間、分裂状態にあった。200 年代には魏・呉・蜀の三国が争い、魏を継承した西晋が 280 年に三国を統一するが、その西晋は 316 年に匈奴に倒される。以後、華北は北方遊牧民族に占領され、漢民族は民族移動して華南に逃げて東晋を創る。439 年に鮮卑の北魏が華北を統一してからは、鮮卑族の王朝と、華南の漢民族の王朝が全国制覇を期して対峙する(439～589 年)。

この間、周辺国にとっては安泰であったが、589 年に隋が南北朝を統一すると事態は一変する。610 年隋は流求(沖縄)を蹂躪し、朝鮮半島の高句麗に何十万もの兵力で襲い掛かる。高句麗はとりにあらず隋を撃退するが、618 年に唐が隋に代わると、唐は 630 年に北の東突厥、635 年に西の吐谷渾(とよくこん)、640 年に高昌(ウイグル)を滅ぼして属国にする。

こうなると次は朝鮮半島が危ない……、高句麗・百済・新羅にとって唐の侵略が現実の脅威となる。当然、半島から海を越えて直ぐの《九州の王朝》にとっても対岸の火事では済まなくなる。こうして《九州の王朝》は、600 年代の前半期に、膨大な労力を費やして、『神籠石』の山城群を造ったと考えられるのである。

このとき近畿王朝はうまく立ち回った。「九州は《九州の王朝》が防衛せざるを得ないから九州に任せておけば良い」と高みの見物を決め込み、近畿王朝としては何の防衛体制も取らなかったのである。「もし、九州の勢力が唐と戦って負けたら……」、「その場合に備え、唐との戦いには加わらずにいた方が得策である……」、私には近畿王朝はそんな腹でいたように思われる……。

なお、九州勢力の本拠である筑紫平野の西の入口は『おつぼ山神籠石』、南は『女山(ぞやま)神籠石』、東は『杷木(はき)神籠石』で固めているが、肝心要の博多湾からの北の入口を守る『神籠石』がない……。私は長年、これが不審であった。古田さんが、「《ずっと後の時代に近畿王朝が造っ

た『水城』と『大野城』を、《九州王朝の造った山城》であると誤解された」のも、筑紫平野の北の入り口に『神籠石』が発見されていなかったからかもしれない。

ところが、古田さんが「九州王朝の本拠は大宰府である」と主張した20年後の1999年、「大宰府」の南にある低い丘陵地帯を越えた先の「宮地岳」に、『神籠石』と全く同じ特徴を備える山城が発見された。

この『宮地岳神籠石』は、博多湾岸から「大宰府」を通って筑後方面に抜ける二日市地峡帯に面し、東の米の山峠を越えて筑豊盆地に至る古代の要路との分岐点にあつて、北の博多湾と東の米の山峠方向を睨んでいる。つまり九州王朝は、北の博多湾から侵入する大陸軍に備えて『神籠石』を造るのに、「大宰府」の地ではなく、二日市地峡帯の南方にある「宮地岳」を選んだのである。

この『宮地岳神籠石』の発見により、率直に言わせて頂くなら、古田武彦さんの「九州王朝の本拠は大宰府である」の仮説は破産した。

もし、「大宰府が九州王朝の本拠である」なら、その本拠の「大宰府」を博多湾から侵攻する敵の面前に晒し、はるか後方の宮地岳に〔逃げ込み城〕を造る訳がない。「大宰府が本拠で、大宰府を守るなら」、近畿王朝がしたように大宰府の真上の大城山に〔逃げ込み城〕の『大野城』を造る」だろう。

「『大宰府』はやはり近畿王朝が白村江の敗戦の後、『水城』・『大野城』とセットで造った近畿王朝の拠点であり、九州王朝の本拠ではなかった」、これが『宮地岳神籠石』の発見により、劇的に証明されたのである。

ところがこの発見に接しても、古田さんは「九州王朝の本拠は大宰府」の主張を修正しておられない。古田さんの追従者も同様で、今も、「大宰府は日本の首都だった」と唱えている。

九州にお住まいでない方は、「『宮地岳神籠石』発見の意義」を理解できないようである。

多くの方は、「大宰府の平地部分が都城を置くには狭すぎる」ことをご存じない。

また、「大宰府の地も、『宮地岳神籠石』の地も、《同じ地続きの平野》である」かの如くに錯覚しておられるようである。

なお、現在、『大宰府政庁』跡の地表に見える礎石は、平安時代の第Ⅲ期のもので、その下に奈良時代の第Ⅱ期の礎石群が埋まっている。

さらにその下に第Ⅰ期の、礎石を伴わない掘立柱の建物群がある。古田武彦さんが「この第Ⅰ期の建物群を倭の五王のものと考えておられる」のであれば、それはあり得ない。

第Ⅰ期の建物群は第Ⅱ期の建物群と関連を持っており、掘立柱の柱根が残っていない。つまり、第Ⅰ期の建物の柱は全て抜き取られて再利用されているのである。掘立柱は腐るから、今も同じ掘立柱方式を採る伊勢神宮は二十年毎に建て替える。二十年毎は贅沢過ぎるとしても、第Ⅰ期の掘立柱が抜き取られて再利用されたのであれば、第Ⅰ期の建築は奈良時代の第Ⅱ期の建築から見てそれほど古いものではない。倭の五王時代のものである可能性はゼロである。

この第Ⅰ期の建物群も近畿王朝の造ったものであり、古くても672年に唐が去って以降のものを見なければならない。

そして「大宰府」近辺における数十回の発掘成果を見ても、都城の条坊の遺構は一切発見されて

いない。400 年代の**倭の五王**の時代に遡る遺物も皆無である。

古田武彦さんに追隨する**九州王朝**史観の論者の一人が、「**大宰府の地に倭の五王の時代に遡る遺物が発見されていないのは、定説派の近畿王朝一元史観の考古学者たちが、九州王朝時代と考えられる古い遺物が発見されても、これを全て隠しているからである**」と言い切るのを聞いたことがある。しかし、私はこうした**《想像》**には組みしない。

結論を言えば、

「**唐が博多湾岸に『筑紫都督府』を置いた時点で、大宰府の地に都城は存在していなかった**」

「**それより 200～300 年前の倭の五王やその後の九州にあった王朝の宮は大宰府とは別の地にある**」

「**『大宰府』の歴史は、672 年の唐の撤退以降、近畿王朝によって始められた**」

「**大宰府が日本の首都であったことはない**」

これが現在までの「大宰府」の地における**《考古学上の発掘の成果》**と、**《文献の解釈》**から考えられる事実である。

(2016.7.22)

[参考文献]

1. 岩波書店「日本古典文学大系」『日本書紀』720 年
2. 中央公論社「世界の歴史 6」『隋唐帝国と古代朝鮮』礪波護・武田幸男 1997 年
3. 朝日新聞社『ここに古代王朝ありき』古田武彦 1979 年
4. ミネルヴァ書房『大宰府は日本の首都だった』内倉武久 2000 年